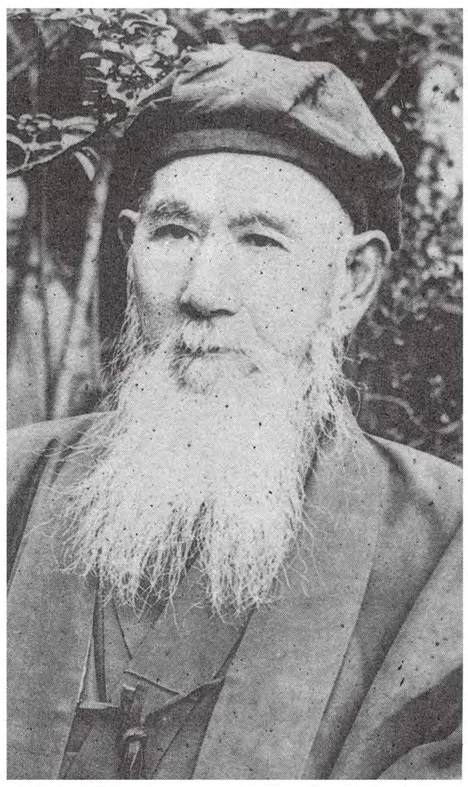
堀川開削410年をふりかえる

堀川をめぐる人びと

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

電気事業を興す志士魂と電力王 丹羽精五郎と福沢桃介

丹羽精五郎　勤王の志士から困窮士族救済へ

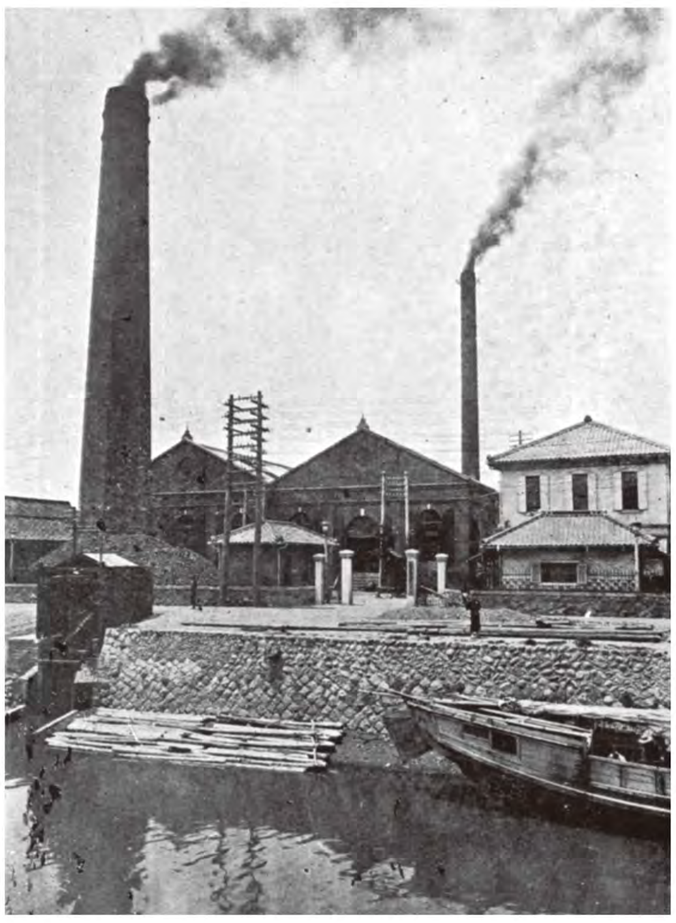

丹羽精五郎

青松葉事件と大久保利通暗殺未遂事件

弘化２年（1845）伏見町に尾張藩士の五男に生まれる。青年期は幕末の動乱期のなか勤王の志士として活躍した。

元治元年（1864）、征長総督となった徳川慶勝に従って第一次長州征伐で芸州広島へ出陣し、壮士隊の一員となって功をあげる。慶応４年（1868）には藩校明倫堂の現役生であるにもかかわらず抜擢されて、佐幕派を粛清した青松葉事件の介錯役となっている。同年の駿府城受け取りの功績が評価され賞典禄を受ける。

その後長く平戸へ遊学し、のち尾張藩士族教育の和合書院（現：愛知郡東郷町）の教師となるも、年々深刻化する士族の困窮にさらなる維新への思いを深め、明治 10 年1月、徒党を組んで大久保利通を襲撃したが失敗、精五郎は朝憲紊乱の罪で士族身分を奪われ、懲役7年の刑で下獄した。九州で西郷隆盛を巻き込む内戦「西南戦争」が戦われていた頃のことである。


名古屋電燈水主町発電所
（愛知県写真帖　明治43年）

士族救済の勧業資金で電灯事業を

明治 15 年（1882）10 月、大赦で釈放された精五郎は、翌年内務省警保局に入省し、18 年に勝間田稔県知事に誘われ愛知県衛生課長となる。だが、そこには相変わらず生活に苦しむ旧藩士の姿があった。

精五郎は貧窮士族救済の勧業資金で電灯事業を興すことを提案し、蒸気機関はいずれ電気に変わると士族たちを説得、勝間田知事も同意見に傾き、明治 20 年、工科大学（現：東京大学）卒業したての甥の丹羽正道を同行し電灯事業の調査と機器の買い付けのためアメリカへ向かい、エジソンから直接教示を受けニューヨークでボイラーなどを、ドイツで発電機を購入して帰国している。これと並行して明治 20 年に名古屋電燈会社が設立され 22 年 12 月に南長島町で開業した。株主は旧尾張藩士族・卒族で九千名以上にのぼった。34 年同社により堀川に交流発電の本格的な水主町発電所が造られたが、その計画から施工まで丹羽正道が参画した。

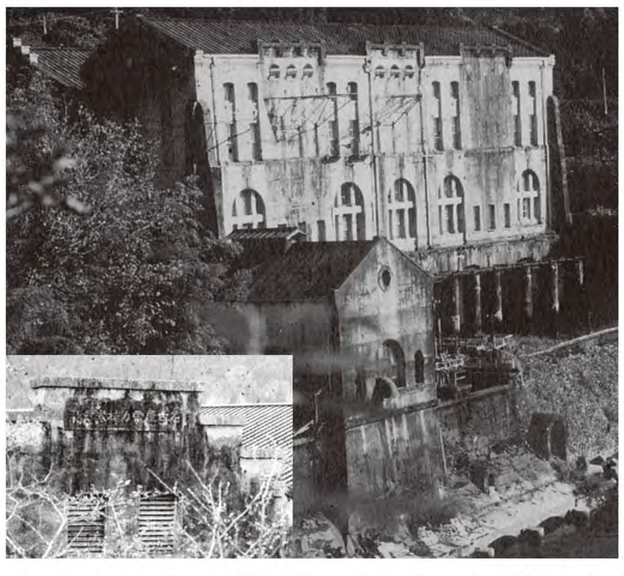
精五郎は明治 29 年に 51 歳で県を退職、その後下水道に使う土管会社を創設し、県伝染病予防委員長を務め、昭和 12 年（1937）92 歳で没した。波乱万丈の青年期、壮年期には電灯事業に注力、熟年期は伝染病予防に尽力、晩年は晴耕雨読の生活を過ごしたという。

福沢桃介（ももすけ）　電力王と呼ばれた人

大井ダムにて　福沢桃介
（文化のみち二葉館提供）

木材の輸送革命と電源開発を両立

木曽川での電源開発に取り組んだが、木曽材の運搬方法だった管流（くだ）しと筏流（いかだ）しに替え、軽便の森林鉄道を敷設して中央線経由で堀川の白鳥貯木場に運べるようにし、木の輸送革命と電源開発の両立を実現した。


名古屋電力の社名が残る現八百津資料館（左）と
旧木曽川水力発電所（名古屋電燈㈱社史より）

療養中に株投資で蓄財し発電事業に邁進

慶応４年（1868）埼玉県の農家に生まれ慶応義塾に入学、福沢諭吉の婿養子となり米国に洋行後次女と結婚。明治 43 年（1910）に名古屋電燈の筆頭株主となり常務になる。一方名古屋財界主体で名古屋電力が発足し、八百津に発電所を着工したが難航、合併をさせて退社した。大正２年（1913）再参加の後、木曽川水系の電源開発に取り組むため後藤新平に相談。元秘書官が帝室林野管理局と交渉した結果、中央線と御料林とを結ぶ軽便の森林鉄道約 90km を建設し無償での提供を求められ、100 万円という巨費が見込まれたが、社内の反対を押し切って、森林鉄道に加え、中央線にもう一本線路を敷設することで解決した。その後、卸売りの大同電力を発足させ、名古屋電燈は配電主体になり東邦電力に再編、松永安左ヱ門に経営を任せた。桃介は 70 社ほどを創業、それらが中部電力、関西電力、大同特殊鋼、東亜合成、名古屋鉄道などに繋がっている。昭和7年に家督を譲り隠居、13 年2月に 69 歳で没した。

川上貞奴と大正7年から東区東二葉町で同居した。その邸宅は橦木町に移築され「文化のみち二葉館」となり多くの人が訪れている。